

古文 随筆

徒然草

兼好法師

亀山殿の御池に



講師

畠山 俊

理解を深めるために

■学習のねらい■

水車という「ものづくり」を通して、「ものづくり」には何が大切なのかを考えます。現代の仕事を考えるうえで参考になることでもあるので、的確に読解しましょう。また、『徒然草』の属する随筆というジャンルとはどのようなものかを、序段を読み解くことで理解します。

*

*

*

大井の人の水車造りを理解する

亀山殿の御池に水を引き入れるために水車を用いることになりました。地元、大井の人たちに水車を造らせましたが、日にちも費用もかかったのについてうまく回ることはありませんでした。

■注意する語句

●古文異義語

まかす（動詞）「（水を）引き入れる」

いたづらなり（形容動詞）「無駄だ、役に立たない」

●読解のポイント

で（助詞―活用語の未然形に接続する）「ないで」

水車造りで大井の人と宇治の人の違いを考える

次に宇治から人を呼び寄せて、水車を造らせました。宇治の人は簡単に水車を造って、しかも思うように回って水を池に汲み入れることができました。実は宇治はこのころ整備されつつあった水車が多く造られていた地域だと考えられています。水に関する専門知識が豊かだったのでうまく水車を造ることができたのです。

■注意する語句

めでたし（形容詞―ク活用） 「見事だ、素晴らしい」

めでたし	形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
めでた			く	かり	し	き	けれ	かれ
から						かる		

〈参考〉

をかし（形容詞―シク活用…形容詞のもうひとつの活用）

「趣がある、おもしろい」

をかし	をか	しく しから	しく しかり	し	しき しかる	しけれ	しかれ
形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形

*ク活用とシク活用の見分け方

活用語尾に「し」が残っているのはシク活用です（終止形以外）。

『徒然草』について知る

ジャンル……随筆

序段……随筆とは何かという本質を綴った名文。

随筆を書く動機 「つれづれなるままに」

随筆を書くとき 「日暮らし」

随筆を書く場所 「硯に向かひて」

随筆の内容 「心につりゆくよしなしごとを」

随筆を書く態度 「そこはかとなく書きつくれば」

随筆を書き終えた気分 「あやしうこそものぐるほしけれ」

徒然草

兼好法師

亀山殿の御池に

講師

畠山 俊

亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。多くの銭を賜ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、おほかた廻らざりければ、とかく直しけれども、つひに回らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結ひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入ること、めでたかりけり。

よろづに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

【第五十一段】

【現代語訳】

亀山殿の（庭の）お池に、大井川の水を引き入れなさろうと思われて、大井川沿いの住民にご命じになって、水車を造らせなされた。多くの費用を下さって、数日かかって造り出して、（大井川に）仕掛けたところ、全く回らなかつたので、あれこれと直したけれども、結局回らないで、役に立たずに立っていたのであった。

そこで、（次に）宇治の里の人を 呼び寄せなさせて、（水車を）造らせなされたところ、やすやすと組み立てて差し上げた水車が、思った通りに回って、（川の水を汲み上げて（池に水を）入れるのが、素晴らしかった。

何事につけても、その専門に通じている者は、たいしたものである。